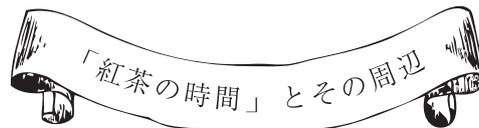


きもちは、 言葉を さがしている



第 42 話

水野 スウ

東京調布のレストラン、クッキングハウスへ毎春、「スウさんのピースウォーク」という通しタイトルで、お話の出前に行っています。今年はコロナのことがあって二度の延期をお願いし、この11月にやっと行くことができました。三度目の正直のせいか、たちまち満員御礼、札止め。今回のマガジン原稿では、今年で通算16回目となるクッキングハウスでのおはなし会をレポートしたいと思います。

まずはメンバーさんたちと

クッキングハウスは、心の病気を体験した人たちが働いているレストラン。どのメンバーさんもお薬を服用し、精神科に通院しています。代表の松浦幸子さんは、メンバーさんたちと一緒にごはんをつくり、おいしい食事をともにするためにクッキングハウスをオープンし、やがてその食事を誰にでも来てもらえるレストランでお出しする、ということをはじめた精神保健福祉士さん。クッキングハウスの活動は今年で34年目にはいりました。

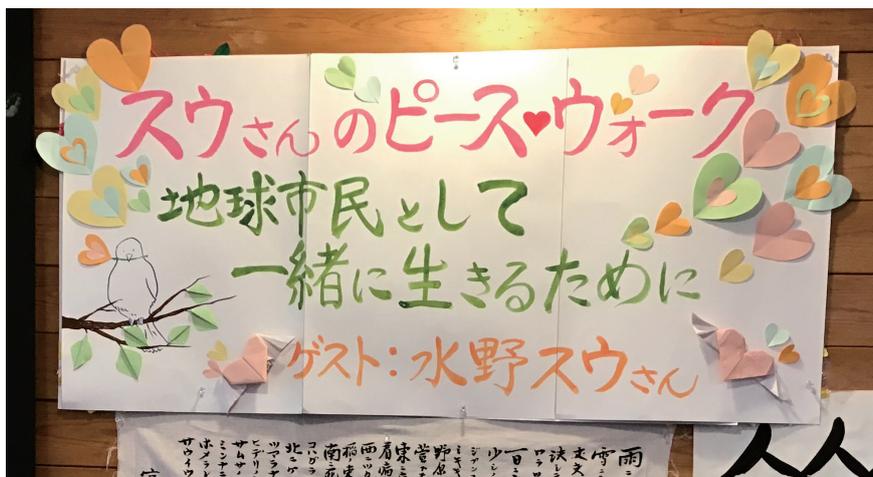
クッキングハウスは、月曜から金曜までのレストランと土曜のメンバーさんたちとの昼食会を、コロナの緊急事態宣言下の春も、休むことなくいつも通りにあけてきたそうです。そのことを、たしか5月だったか、松浦さんがさりげなく「ここは閉じられないよ、心の居場所だからね」と言われたことで、私は知りました。それがどれほどすごいことか、あの時期、勇気の要ることだったか、どんな時もぶれない、松浦さんの凛とした姿勢にハッとしました。

コロナで何もかも一変したかのようなこの社会で、これまでと同じ笑顔とおいしいごはんが変わらずここにある、そのことが、メンバーさんにとっても、レストランに見えるお客さまにとっても、どんなに大きな安心と平和だったろう。実際、あの時期も、今も、去年よりずっとレストランのお客さまの数が多そうです。他に行くお店がなくて、という人もいたろうし、コロナで心がぎゅっと押し込められて苦しくなった人も、このレストランに来て、クッキングハウスの場の持つ空気の中でお昼ご飯を食べ、メンバーさんと何気ない会話をかわし、ほんとと深呼吸

吸できて、救われた気持ちになった人がどれほどいたことだろう、と思います。

おはなし会は、いつもならメンバーさんたちも一緒に聞くのがクッキングハウス流だけど、今回、あまりに混みすぎるのはよくないよね、ということで初の2部制に。外からのみなさんにお話する前の短い時間で、90分の話がギュッと20分に凝縮して、メンバーさんたちに語りました。

この日は、11月にしてはめずらしく小春日のあたたかい日で、開け放した窓から心地よい風が吹き抜けていきます。その年のテーマにあわせて毎年手づくりしてくれるタイトル、今年もやわらかくあたたかな色合いでお迎えしてくれて、まるで、いつもの春のスウさんおはなし会かと錯覚してしまいそう。ちょっと違うのは、メンバーさんたちが皆マスクをして、私もマウスシールドをつけていることだけでした。



クッキングハウスには、メンバーさんたち作詞作曲のオリジナルソングが何十曲もあって、この日も、私を真っ先に歌で歓迎してくれました。なので、私からも歌でお返しを。この日、集まってくれたほとんどのメンバーさんと私は、毎年のおはなし会を通してすでに顔なじみです。ほんとにほんとにやっとなあえたね!のきもちをこめて、音楽劇「森は生きている」の中の「一瞬の今を」を、こんな替え歌にして歌いました。

♪ やっとなあなたに逢えた
クッキングハウスの贈りもの
コロナの世界の希望
一人ひとりがつながって
一瞬の今を 千秒にも生きて
このうれしさを 胸に 胸に
胸に 刻もう

歌からはじまる

続く第2部、みなさんに向けて。この日を待ちに待っていてくださった、たくさんの懐かしいお顔、初めてのお顔。みなさんマスクをしているから顔の上半分しか見えないのに、どの目元も笑っていてあったかい。とても厳しい状況の中（この日、東京での感染者数は500人超え）、足を運んでくださったみなさんの気持ち、おはなし会をひらいてくださった松浦さんの気持ち、その両方に心から感謝しつつ、せいっぱい誠実に語ることでこたえよう、と身のひきしまる想いです。

始まりは、今しがたメンバーさんたちにも歌った「一瞬の今を」の歌から。ふつうは講演会で、その日のゲストスピーカーがいきなり歌いだすなんてまずないことだから、はじめてきた方はびっくりされたでしょう。しかもそれがなんとも心細いささやくような私の歌声だから、なおさらね。

だけでも、クッキングハウスっていつも歌があふれているところなんです。仲間同士、集まってすぐ歌い出すのは自然で当たり前のこと。それもまたクッキングハウスという場所の大事な特徴なので、それをおはなし会のはじめにみなさんに感じてもらいたかった。それにももちろん、その場においてくださるどなたとも、やっとなあえたね、生でほんとに会えたね、といううれしさを、この歌で表現したくもあったのです。

コロナ下の紅茶の時間

お話のはじめは、この半年余りの「紅茶の時間」のことを。ちょうどその週で満37年になる、自宅を週に一度ひらいて、誰でもどうぞ、の紅茶の時間は、コロナ下もずっとあけていました。あいていることを知らない人も多く、誰もこない週が続けて3回あったけど、その後、人が少しずつ戻ってきて、それ以後、今に到るまで毎週、紅茶はお寺のように静かにあいています。

ずっとどこにも出かけなかったという人が久しぶりに紅茶に来たら、あふれ出す洪水みたいに話が止まらなくなったり、かと思えば、あまりに長く生で人としゃべっていなかったせいか、やっと紅茶に来れたのになかなか言葉が出てこない、という人がいたり。

社会のことを知りたくていつもたくさん質問をする若いお母さんが、ひと月ぶりに来た紅茶で私を質問責めにする日もありました。対話のキャッチボールが小一時間余り続いたあと、彼女が目をキラキラさせて言ったこと。「ああ、こうして直にあえて、知りたいこと聞けるって、うれしい!」。そのうれしいは、むしろ私の方でした。彼女の言葉は、紅茶の場が人と人との平らな関係をつくれていることの証明みたいでもあり、一人ひとりを大切にしたいと思う私なりの13条の実践を認められたようでもあり、とても幸せなきもちになったからです。

その時期、今更のように強く感じたことは、紅茶の時間って、誰かしらがやってきて、言葉がそこで交わされ、きもちを受けとめたり、受けとめられたり、それではじめて紅茶という場になるのだな、そこに器だけあっても、誰も来なければ紅茶の時間にはならないのだな、ということでした。人が来てくれるおかげで、私自身、コロナの時期も人と確かにつながっている、と実感し続けることができたのです。

からだの共鳴

人と人が実際に顔をあわせて会うことの力、生とリモートの違いについては、コロナのことが起こってからずっと考えさせられてきたけど、この日のク

ッキングハウスでもそのことを、頭でよりもからだで、じわじわ感じていました。オンラインでは、相手の顔をパソコンやスマホの四角い枠の中だけで見て会話しているけど、こうして生で会っている時は、その人を全体で見て、まわりの人のうなずきや笑い声、たとえば今この場を吹き抜ける風も一緒に感じあいながら、クッキングハウスという場の空気感ごと、やっとこ会えたあなたとの一瞬の今を、みなで共有している、そんな感覚があります。

ゴリラの研究で知られる京大総長の山極寿一さんが「人間は進化の過程で、信頼をつくるのに言葉だけに依存しなってきた。しかし今、からだの共鳴が失われて、言葉だけでつながる社会に放り出された時、人間は一体どうなるのか」と言ってらっしゃいました。

これは、怖いけれど、とても大事な視点です。山極さんは続けて、人と人とが共鳴するのにもっともいい手段は音楽だ、と。だとすれば、クッキングハウスのメンバーさんたちがいつも歌や音楽とともにあるってことは、お互いのからだで共鳴しあいながら信頼関係をつくってきた、ということでもあって、それは今の時代、誰にとってもいっそう大切なことだ、とあらためて思うのです。

リタさんとリコさん

自己紹介がてら、ここ数ヶ月の紅茶の時間のことを話した後は、いよいよこの日のおはなし会のテーマに。昨年の暮れ、松浦さんからいただいたテーマは、「地球市民として一緒に生きていくために」というなんとも壮大なものでした。松浦さんの中に、12月にアフガニスタンで凶弾に倒れた中村哲さんへの想いがあることはすぐにわかったものの、それをおはなし会の中でどう活かせばいいだろう、と考え始めた矢先、新型コロナが出現したのです。

松浦さんからのお題は、まるでほんのちょっと先の未来を見越していたかのよう。コロナがまたたく間に世界中を駆け巡り、地球がひとつながりであることを思い知らされました。否が応でも、一人ひとりが、地球市民として他の人たちと一緒に生きていくためにはどうしなきゃならないのか、自分だけよ

けりゃいや、ってわけにはもういかないんだよ、とコロナから、私たちはいま突きつけられているのです。

この日、伝えたいキーワードの一つは、リコさんとリタさん。リコさんは、「利己」、自分だけよければいいや、あとは知らない、という人のこと。リタさんは、「利他」、目の前に困っている人がいたら、どうしましたか、と声をかけて手を差し伸べる人のこと。それは自分を無にしてただ人に尽くす、ということじゃなくて、みんなの幸せが自分の幸せになって返ってくる、と生きて生きる人のこと。

リタさん、って聞いて、思い浮かぶ人いますか？って訊くとすぐに、中村哲さん、という声が上がりました。そうですね、それに宮沢賢治さんも、ウルグアイの大統領だったムヒカさんも、どんな命にも順位をつけない風の谷のナウシカも、そしてクッキングハウスの松浦さんも、私にとってのリタさんたちです。

コロナがこの先、どうなっていくのか、誰にも見えません。様々な不安や恐怖がうずまくのは当たり前。こんな時、自分だけの幸せを追い求めない、リタを生きる人たちが何人か、私の心の中に住んでいてくれたなら、暗闇で心細くて迷子になりそうな気持ちにちいさな明かりが灯ります。あの人だったらどう考えるだろう、何を選んで進むだろう、と思い巡らし、その人と対話してみる。そういう人たちの存在が自分の中にあることが、コロナの時代に、一隅を照らすともしびになってくれるのではないかと、思います。

哲さん語録

先ほどお名前のあがった、中村哲さん。医師でありながら、いや、命を救うのが仕事のお医者さんだからこそ、医療だけではパキスタン、アフガニスタンの人々の命を助けられないと知って、医師を続けながら井戸を掘り、それだけではとても足りない、と、独学で土木を学び、2000年からは干ばつで砂漠化したアフガンの大地にクナル川からの用水路を拓く、という途方もない一大事業にとりくんでこられました。

40キロに及ぶ用水路の完成で、砂漠に緑の大地がよみがえり、人々は農業が再びできるようになって、戦争のせいだけでなく、干ばつによっても難民化していた人々が故郷にもどれるようになりました。65万人以上もの人々がこの用水路のおかげで自ら生活していけるようになったということです。

まさにこの日のテーマの「地球市民として一緒に生きる」ということを、長年に渡って実行してきた哲さん。哲さんの言葉には、私たちの平和憲法を狭い日本の枠だけでとらえずに、世界中の人たちとお互いの命を大切にして、ともに生きていくってどうということだろう、という視点があふれています。この日は、哲さんの言葉の中から、日本国憲法にかかわる部分をいくつかのフリップしてみなさんに紹介しました。

平和とは

「平和憲法とは、これがなくては日本だと言えないもの。戦闘員、非戦闘員、あわせて亡くなった人、300万人のお位牌である」と、哲さんは言います。また、「正義というのは人の命を尊重すること、それが憲法です」と。

暴力で相手をやっつけられないのが日本という国だと、少なくとも50年間は他国の人に思ってもらっていたことを、哲さんは実感していました。アフガニスタンで常にいのちの危険と背中合わせで活動してきた人が、具体的に感じていた9条の力。ある時期までは確かに、哲さんにとって、9条はすごい力をもった安全保障でした。

9.11のテロの後、自衛隊が米軍に協力支援するというテロ対策特措法が成立する前、国会の委員会に参考人として呼ばれた哲さんは、「自衛隊派遣は有害無益」と言い切りました。アフガンへの爆撃が始まった時は「干ばつで息もたえだえなのに、瀕死の小国に世界中の大国が束になり、果たして何を守ろうとするのか、素朴な疑問である」と著書に書いています。

2003年のイラク特措法で、人道復興支援の名目で自衛隊をイラクに送った日本。アフガンでは急速に反日感情が起きましたが、これが「国際貢献」の

一つの答えだ、と哲さん。はっきりとアメリカを支援したことで、テロの標的になるかもしれない、とこれ以来、哲さんは、活動車両から日の丸をはずしました。

それでもなお、哲さんは2013年のインタビューで、「9条はまだかろうじて力を放ち、自分を守っている」と答えています。

「平和とは、戦争以上に忍耐と努力が要るもの」「平和とは、大地の上に築かれるもの」「平和とは、理念でなく、ここでは生死の問題である」どれも簡潔で、実体験に裏打ちされた哲さんの言葉です。こういった本物の言葉がある一方で、「今のコロナ禍を短時間で解消する方法は、どこかで大きな戦争が発生することではないだろうか」と発言する人もいる。燕市の当時教育長だった人が、戦争が始まれば武器という商品で経済は回復するだろうとしたこの発言が、いかに命を粗末にした軽いものであるか、一瞬で何もかも、人々の積み上げてきた文化も日常の暮らしも根こそぎ破壊してしまう、戦争の本当をいかに何も知らないか、愕然とします。

戦なんかしてる場合かっ!

「戦なんかしてる場合かっ!テロとか戦争とか、そんな暇あったら食べ物とりもどしに行くことですよ!」

これは2015年、安保法案が国会で論じられている最中、哲さんが金沢にみえて医学生たちにお話されている時に飛び出した言葉。それまで淡々とした口調で、アフガンでの医療や用水路について語り、ひび割れた大地が用水路によって、年ごとに緑の大地に変貌していく様子をスライドで写しながら穏やかに話されていたのに、急に語気をつよめて、そんな場合かっ!と腹の底から言われたのです。

戦争よりもっと大事な、待った無しの状況がここにあるのに、何を考えてるんだ、何をばかなことしているんだ。

戦闘や干ばつでふるさとを去らなければならなかった人たちが、用水路が通ったことで戻ってきている、武力では決して緑の大地も平和も生まれなことを、誰より知っている哲さんの、怒りと悲しみを

じかに感じた瞬間でした。

「平和の反対は、安倍さんの、積極的平和主義。言葉だけで、平和の反対と思う」哲さんの言葉は、どこまでもはっきり明瞭です。

「用水路に水が通ると、真っ先にくるのは子どもたち。牛が水を飲みにきてトンボや鳥も来る。お母さんたちが一番よろこんだ。子どもが水浴びすることで皮膚病が減り、お母さんたちの水汲みが楽になったのだ」これが武力によらず、忍耐と努力で得た、平和の光景です。

お恵みください

「人間と自然がいかに折り合って生きるか、自然を意のままに操作しようとするのは思い上がり。ほんの少しお恵みください、という姿勢なしには、クナール川の用水路はとても成功するものではなかった」

コロナウイルスの感染が広がる中、改めてウイルスという自然と私たちが共に生きていることに気づき、哲さんのこの言葉が響きます。

地球の温暖化は、すさまじい干ばつとなってアフガニスタンの大地をおそいました。去年あたりからよく耳にするようになったSDGs(国連の定めた持続可能な開発目標)ですが、その言葉が聞かれるずっと前から、哲さんは自然に対して謙虚な、お恵みください、という姿勢で、アフガンの人たちの力で維持することが可能な用水路づくりをめざし、それに取り組んできたのです。

完璧な用水路、というものはない。大河が暴れば堰は決壊するのだから、修復は必須のこと。それを知っている哲さんは、用水路の建設にハイテクのおおがかりな機械を用いず、高価なコンクリートもできるだけ使わないようにして、用水路の距離を伸ばしてきました。

現地の人たちの持っている技術で(実は、自分たちの家を石でつくるアフガンの人たちは、誰もがすばらしい石工なのだそう)、現地にある材料で、そこに住む人々の手で壊れた堰を補修できるよう、常に考えていた哲さん。故郷福岡の山田堰で古くから用いられてきた蛇籠じゃかごの技術をアフガンの人々に教え、彼ら自身が鉄線を籠状に編み、その籠の中に石を詰め、川に落

として堰の補強にするという持続可能な方法でメンテナンスできるようにしたのです。

実行するもの

哲さんは、2013年の講演会で「9条は守るのでない、実行すべきものだ」と語っています。この時のインタビューで「他国に攻め入らない国の国民であることが、どれほど心強いのか。単に日本人だから命拾いしたことが何度もあった。9条はリアルで大きな力で僕たちを守ってくれている」とも。

9条を体現する人、として知られる哲さんですが、私は哲さんが9条だけじゃない憲法も体現している人だと感じています。

たとえば、アフガニスタンの大地で、武器を持たず、人々と対話し、誠実に行動することで信頼をえて、用水路を切り拓いてきた哲さんは、9条の人であるのはもちろんだけど、不断の努力の12条の人でもあると思います。

用水路をつくる作業現場にいる哲さんに会いに行った人が、一体どの人がその人か、見分けがつかなかったそうです。アフガンの人たちと同じ帽子をかぶり、陽にやけ、作業着でショベルカーを運転するその人を、まさかあの有名な中村哲医師だとは思わなかったと。このエピソードからも、哲さんが相手に対して決して上から目線ではなく、平らに話し、ともに汗を流して働いている姿が目につきます。

その姿が、私には日本国憲法前文の中の、ある文言と重なりました。「人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであって」というくだりです。この言葉を知った最初は、固い言い回しで、どう理解すればいいかわからなかった。けれどこの言葉を、人間と人間の間にはどうあるべきだろう、どうあったらいいのだろうか、と読みかえてみた時、人と人が互いに相手を尊重しあう、そういう関係をもつていけたとしたら素晴らしい、それが理想的なことだ、と思いあたりました。そして、ああ、そうか、その実現がものすごく困難なことだからこそ、崇高な理想、と憲法に書いてあるんだ。そう読み解くことができ、このくだりがやっとその時、私の腑に落ちたのでした。

たやすくしないことを百も承知で、尊重しあうための努力を誠実に重ねること、それって、「わたしも、あなたも、ほかの誰ともとりかえがきかない存在。たがいの大切さは行ったり来たり」と謳う13条の、個人の尊重を実践することでもある、と思いました。日本とはまったく異なる文化を持つ国で、相手の伝統や文化、宗教に敬意をはらい、相手をリスペクトしつつ、用水路の難事業にたゆまず取り組む哲さんは、その意味でまさしく13条の人でもある、と私には思えるのです。

私にとっての哲さんは、9条の人、不断の努力の12条の人、そして違う文化を持つ人たちを尊重する13条の人、そしてリタのひと。

アフガンの長老のこの言葉の中にも、リタさんとリコさんが出てきていました。

「世界にはふた通りの人間がいる。一つは無欲に他人のことを思う人たち。もう一つは自分の利益のみをはかることで心の曇った人たちである。あなた方がどちらであるか、おわかりでしょう。決して私たちはあなた方日本人を忘れません」

2020年、哲さんは本当に星になりました。北海道のアマチュア天文家が20数年前に発見した火星と木星の間にある直径6キロの小惑星に、今年、「中村哲」と名前がついたのです。

マエソラ

おはなし会の最後は、「マエソラ」の時間。マエソラ、と聞いて、???顔のみなさんに、日本国憲法前文(まえぶん)を諳(そら)んじることをわたし流に、マエソラ、って呼んでいるんです、と説明しました。前文には難しい言葉が多いので、そのままそらんじると、言葉というより音の羅列に聞こえてしまう。それじゃもったいないので、マエソラをする前は、かならずミ二解説をします。

前文の中に何度も出てくる「われらは」「われらの」という言葉は、憲法が政府の持ちものではなくて、わたしたちのものだという証拠です。つまり主権在民。それに対して、先の戦争は政府の行為によ

って引き起こされたものだということが、1節目でははっきりとされています。2節目に出てくる「人間相互の関係を支配する崇高な理想」という言葉は、先ほど話した、哲さんが実践してきたような、平らな13条的態度で尊重しあうこと、と思いながら聞いてくださいね。

同じく2節目の中に、「先制と隷従、圧迫と偏狭」という耳慣れない言葉が並んでいます。先制は、独裁。隷従は、奴隷のように従わせられること。圧迫は、上から押さえつけられること。偏狭は、不寛容、でしょうか。それらをなくしたいと願うものの、現実はまだ今のこの社会をそっくり表している言葉のようでもありますね。

一番知ってもらいたいことは、私たちの憲法が、世界中の人たちの平和を願っていること、自分の国のことだけ考えて他国を無視するのはだめだよ、という、自国ファーストでないリタさん憲法であることです。それをマエソラを通して少しでも感じていただけたらいいな。では、日本国憲法前文のマエソラをどうぞ——。一呼吸置いてから、私はゆっくりとマエソラを始めました。

「日本国民は、正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し、われらとわれらの子孫のために、諸国民との協和による成果と、わが国全土にわたつて自由のもたらす恵沢を確保し、政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する。そもそも国政は、国民の厳粛な信託によるものであつて、その権威は国民に由来し、その権力は国民の代表者がこれを行使し、その福利は国民がこれを享受する。これは人類普遍の原理であり、この憲法は、かかる原理に基くものである。われらは、これに反する一切の憲法、法令及び詔勅を排除する。

日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであつて、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてある国際社会において、

名誉ある地位を占めたいと思ふ。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。

われらは、いづれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならないのであつて、政治道徳の法則は、普遍的なものであり、この法則に従ふことは、自国の主権を維持し、他国と対等関係に立たうとする各国の責務であると信ずる。

日本国民は、国家の名誉にかけ、全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓ふ」

マエソラが終わると、それまで身体中を耳にしてシーンと聞いていてくれたみなさんの空気が、ふわあっとほどけて、それからあたたかい拍手が起きました。その拍手の中で、私もまた、ほどけていくのを感じました。

歌に始まり、詩で終わる

続くふりかえりシェア会では、コロナ下のこの状況でおはなし会が実現したこと、今日こうして集まったこと、直に会えて生で話をわかちあえたうれしさ、よろこびを、みなさんが次々口にしました。

生とリモートについては、こんなすてきな発見をしてくれた人も。

「生の時は全体でその人を感じている。っていうことは、その人のbeを感じているということなんだろうな。do =何かできる、というだけで人はできているのじゃなく、その土台にある、ただその人として存在している、というだけのbeが、人にとっての本質の部分なのだろうなと思う。リモートでは、doは見れてもbeを感じられなかったのが、今日ここに来てめちゃくちゃいろんな人のbeを感じられて、そのことにただただ感動しています」

「生の話を聴く機会は本当に久しぶり。言葉だけに依らないコミュニケーション、からだで共鳴するコミュニケーション、最後のマエソラでそれを感じた」という感想も。この反応は、ちょっと意外でした。マエソラそのものは言葉なんだけど、同じ空間をとともにすることで呼吸が合わさっていき、私のそらんじた前文が、その人のからだの中でも響いたよ

うに感じてくれたのかもしれませんが。そのほかにも、マエソラがすごく心に残った、まるで詩のよう、叙事詩を聴くようだった、と何人もの方が言ってくれました。

哲さんの「実行するもの」という言葉が一番印象的だった、という人からは、「目の前の一人を救うこと、それが政治家に最低限求められることなのに、果たしてそのことわかっているんだろうか。マエソラがとてもよかったので、国会議員にかならずマエソラを義務化して（会場から、おお〜！の声）、憲法を自分ごとに、憲法を守る義務は自分たち政治家の方だと、ちゃんとわかるようになってもらいたい」（拍手）と、うれしくも大胆な提案もありました。

コロナの時代、リモートがますます盛んになって、言葉だけが先行する。そんなコミュニケーションが当たり前の社会になってほしくない、そう思っていただけにこの日、マエソラがはからずもある種の音楽になってみなさんと共鳴しあえたことが、意外で、とてもうれしいことでした。このおはなし会が「一瞬の今を」の歌にはじまり、日本国憲法前文のマエソラで終わったのは、その意味でも象徴的なことだったかもしれません。

「我々の役得は、復活した人々とよろこびを共にできること。何ものにもかえがたい尊いものである」

「目の前で困っている人がいたら、どうしたの？と声をかけるのは当たり前でしょう」という哲さんの言葉は、そのまま松浦さんにも重なりそうです。精神の病からリカバリーした人たちの笑顔を見ること、よろこびをともにすることが、松浦さんの幸せ。リタさんを生きる人を身近に感じることは、今の混沌とした社会の中の希望です。

今、誰もが多かれ少なかれ、コロナで傷を負っています。クッキングハウスで33年間、醸造されてきた安心の空気は、そこにやって来る一人ひとりの全体を、やさしく包みこんでくれる。松浦さんが揺るぎない信念でもって、メンバーたちを守りながらレストランを今日もあけ続けていることは、目に見える、一隅を照らすあかりです。

社会が平和でなければ、メンバーさんたちはこころ穏やかに生きられない。そのことを重々知っているから、松浦さんの平和を求める気持ちは人一倍強くてぶれません。松浦さんもまた、9条を実行する人であり、12条の人、そして平らな13条の人、リタさんだと、コロナの時代を通して私はいっそう確信しています。

*写真は、あの替え歌の歌詞、正確に知りたいから教えて、と松浦さんに言われて、クッキングハウスのホワイトボードに走り書きしたものです。

